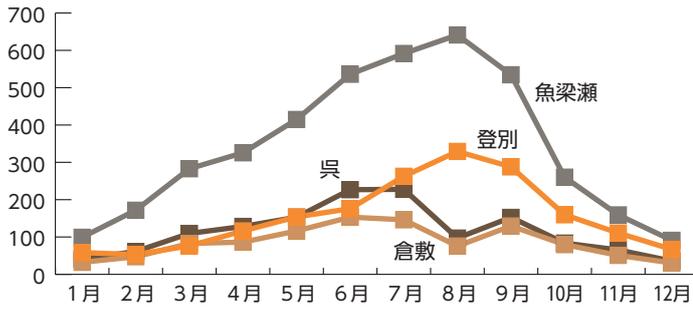


【月降水量平年値】



【6月28日から7月8日までの間で記録した降水量】

高知県安芸郡馬路村魚梁瀬	1852.5 ^{mm}
高知県長岡郡本山町本山	1694.0 ^{mm}
岡山県倉敷市倉敷	309.5 ^{mm}
広島県広島市呉	518.5 ^{mm}

【平成30年7月豪雨で各時間降水量の観測史上1位を更新した地点数】

1時間降水量	14地点
3時間降水量	16地点
6時間降水量	31地点
12時間降水量	48地点
24時間降水量	76地点
48時間降水量	124地点
72時間降水量	122地点

広範囲に長時間降り続いた大雨

多くの被害をもたらす

『平成30年7月豪雨』は、西日本から東海地方を中心とした広範囲に数日間わたって記録的な大雨が降り続いたことが大きな特徴です。

特に気象庁が1府10県に対して『大雨特別警報』を発表した7月6日(金)から8日(日)にかけて、東シナ海や日本の南海から湿った空気が西日本に流れ込み続け、次々と雨雲が発生・発達し、大雨をもたらしました。

四国や中国・九州地方など、多くの観測地点で24時間、48時間、72時間の降水量の値が観測史上1位を更新。6月28日(木)から7月8日(日)までの総降水量が四国地方では1千800^{mm}を超えるなど、記録的な大雨が降ったことで、31道府県で多くの土砂災害や河川の氾濫などが発生しました。

被害の大きかった広島県呉市では、土砂災害により、道路や鉄道などが寸断され、人口20万人を超える中核市全体が一時的に陸の孤島となりました。

また、岡山県倉敷市では、1級河川の高梁川へと注ぐ支流・小田川の堤防決壊などにより、5千棟以上の住家に全壊や半壊などの被害が発生しました。

被害が集中した呉市と倉敷市の2地域における11日間の総降水量は、この期間での総降水量が一番多かった高知県安芸郡馬路村魚梁瀬と比べると3分の1にも満たない値でしたが、両地区の『7月の月降水量平年値』の2倍以上の雨がわずか数日の間に降りました。

それぞれの地域には、雨の多少や地盤の固さなど、地形などに関係した特性があります。

『平成30年7月豪雨』では、広島県や岡山県の瀬戸内海沿岸のような年間を通して比較的雨が少ない地域にも、例年をはるかに超える大雨が発生したことが、大きな被害をもたらした要因の一つといえます。

日頃から地域の特性を知る

大雨が引き起こす災害

登別市では、平成29年9月に台風第18号が接近した影響で大雨となり、胆振幌別川の水位が

上昇したため、青葉小学校などに避難所を開設し、『避難準備・高齢者等避難開始』を発令するなどの措置をとりました。幸い、氾濫には至らず、大きな被害はありませんでしたが、登別市においても、これまで発生したことがない大雨にいつ見舞われるか分かりません。

市は、胆振幌別川や来馬川、鶯別川が約50年に1回程度起こる大雨によって増水し、氾濫した場合の浸水予想結果に基づいた浸水予想範囲とその深さを表した『河川洪水による浸水想定区域』や土砂災害によりお住まいの皆さんの生命または身体に危害が生じる恐れがある『土砂災害警戒区域』などを市内地図に反映した『洪水・土砂災害防災マップ』を作成し、平成26年に全戸配布したほか、市への転入時に随時配布しています。

日頃からの防災意識

今回の豪雨災害で、河川が氾濫した倉敷市真備町では、倉敷市が作成した『洪水・土砂災害ハザードマップ』に掲載されている浸水想定区域と同じ区域で浸水の被害が発生しました。

東日本大震災の事例から見ても分かるように災害は人知の及ばない状況を生み出す可能性があるものの、今回の事例では、防災マップなどの有効性が確認されています。

自分が住んでいる場所や長い時間を過ごす学校・職場などの地形などを把握し、大雨などにより水害や土砂災害が発生する危険性が高まった場合に、どの避難場所に、どのような経路で避難すればよいかなどをあらかじめ確認することが重要です。

また、局地的な記録的短時間大雨が発生した場合には、市街地の排水機能を超える雨水などにより、側溝や排水路などから水があふれ、建物や道路などが浸水することがありますので注意が必要です。

日頃から、防災マップなどを活用し、いつ起きるか分からない災害に備えましょう。

大雨が予想されるとき

待つだけではなく、集める

『平成30年7月豪雨』については、多くの被害が発生した7月6日(金)の前日、5日(木)に気象庁が会見を開き、記録的な大雨